北海道国際理解教育研究協議会 会報

第12号
代表 磯貝 登
事務局長 大泉 弘
事務局 板垣 修
1990
発行 2・20

例年になく厳しかった寒さも和らぎ、日ざしに春を感じられるようになりましたが、会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、平成元年度は　第10回北海道国際理解教育研究会・第5回札幌国際理解教育研究大会に代表されますように、成功裡のうちに閉幕となりました。また、各支部の活動も活発化の一途を辿っており、各会員のご尽力の賜物と厚く敬意を表します。

平成元年度の業務計画は昨年3月9日の理事会・総会にて承認され、実施に移されており、今年度の業務としては、平成2年度在外教育施設派遣激励会及び交流会と総会・理事会を残すのみとなりました。2年度は別紙の通り20名を送りだすことに内定しており、時節がらお忙しいとは思いますが、多くの会員に出席していただき、派遣者への激励や助言をお願いしたいと思います。事務局では理事会・総会に向けて準備をしておりますが、事業内容や本会の運営についてのご意見やご要望がありましたら、事務局まで葉書等でお知らせください。平成元年度の総括・会計報告・平成2年度の事業計画等につきましては3月15日付の会報13号にてお知らせいたします。

『世界に通じる個性豊かな児童・生徒の育成』
～いつでも、どこでもできる国際理解教育～

札幌大会が昨年11月224名の参加者を集め、札幌市立八軒西小学校・稲積中学校・札幌市教育文化会館を会場に行われました。
札幌支部では、大会に向けて精力的に取り組まれ、大会はもとより紀要をも立派にまとめられ、高い評価をうけました。会員のお手元にはすでにその概要についてご承知のこととは思いますが、改めて掲載いたしました。尚、手違いにより大会の報告が大幅に遅れましたことと紙面の関係から一部抜粋になりましたことをお詫びいたします。　P2～8参照

第１分科会（小学校　社会・音楽）

分科会テーマ　「国際性豊かな子どもを育てる授業」

１．提言内容

（子ども像）開かれた心を持つ子ども（授業像）自分らしさを発揮して、他とのかかわりの中で高まりのある授業

音楽、日本の伝統的な歌の中でのたのしい活動、豊かな表現を通してイメージをふくらませる

社会、自分の考えを個性的に発揮できること、子ども同志の交流がある授業、人間の営みや文化を理解できる学習、以上の考えで、育てたい子ども像にせまる。

２．討議内容

低学年では、心情面での国際化が大切なことといえる（音楽）

- 日本の伝統的歌を通して文化を知ること、歌と文化は、深いつながりがある。
- 何のテレもなく、人前で踊れるということは、まさに国際人に必要な要素である。
- 学級経営の中で培われたマナーやルールは国際人として大切なことであり、すばらしいことである。
- わらべ歌という日本の文化を知るということは、日本を理解してもらう一手段として、大切なことであり、子ども達は貴重な経験をつんでいるといえる。

教科のねらいと国際理解のむすびつきをどうするか。（社会）

- 子ども達は、ニュージーランドの予備知識が豊富であった。しかし、資料（マトン）の提示が教科のねらいに結びついていなかった。マトンの提示は、子どもにゆさぶりをかけることができたが、逆に子どもの興味・関心が、ねらいからはずれ、疑問が生まれてこなかった。
- 本物の資料のよさはある。今回は、マトンを通し、子ども達がいろいろなこだわりをもちニュージーランドから札幌までのルートを知り「いつも食べている肉は、ニュージーランドからきているのだという見方ができることでよしとすれば、資料は生きてきた。
- マトンの姿そのものが、ニュージーランドの文化そのものであると思う。あのような姿の肉を見ることのできない子ども達にとっては、ニュージーランドの文化にふれたといえる。

３．助言者から

ニュージーランドという国を通し、その国を社会の教科のねらいとからめ、どの程度まで教えるのかということが、大切になってくる。今回のねらいを達成させるには、資料が多すぎる気がした。子どもの連続する問いをつなげた授業法が子どもを生かすことになると思うが、今回は、やや教師主導型になっていた。

日本人の体の中に脈々と生きている音感覚をひき出し、それを遊びという形で子ども達が楽しく活動していく中に音楽があった。学年の系統をわらべうたでつくれそうだ。

必要な時に必要なだけ教科の中に外国を取り込んでいけばいいと思う。その時、大切なことは排除ではなく、取り込みの論である。

４．ま　と　め

国際性豊かな子どもを育てるということは、知識を教えることではなく、外国の文化や日本の文化にふれていく過程で心情を育てていくことが大切なことであり、それは日々の学級経営や、教科の実践の中で自然に育てていかなければならない。　（文責　板木　武）

第２分科会（小学校　国語・道徳）

国際性豊かな子どもを育てる授業

1．提言　八軒西小　　国際理解教育をどのように具現化するか取り組んできた……

道徳部門・自分を見つめさせる道徳教育が国際性豊かな子どもの育成につながる。
・本日の授業では自分ならばどうする……自分を見つめさせるのをポイントにした。
・外国の例を紹介することにより深化をはかった。

国語部門・豊かに自分を表出できる子、自分の考えをもって言葉の働きを大切にしながら発表できる子をめざす。
・外国の教材を使うのではなく言葉をきちんと知ることを大切にした。
・平和教材が国際理解につながるのではないか。
・ねりあいを大切にした。
・教師のかじ取りが難しい。

授業者より・公共心ときまりを守ることをとりあげた。
・外国の例をとりあげたことはどうであったか。
・単によみとりでなく、自分を変えていくことなんだと教えている。
・読みの深い子はほぼ教師と同格になってきた。
・自分たちがつくった授業と言うことで子供達は大変張り切っていた。
・今後のかじ取りが難しい。

2．討議の内容

①心の立て札について、外国の例は本当に必要だったのか。
（…　本年度から入れてみたが、看板がなくても……以下が強調されたのではないか）
②教材と国際性について
・普通の授業と国際性が接点することは難しいのではないか。
・異文化とぶつかったときどのようにするのかという事も問題になるのでは…
・国語は自己主張という面では活発であった。
③（内なる国際化）をめざし学校の流れでもあった。いつでもどこでもが　強調されていて、評価したい。
④教科との関わりにおいて国語の目標の中で国際化との接点は難しい。
・国際化としての評価の観点が必要ではないか
……　国際理解をメインにしたこともあったが……国語の授業として成立させたかった。
自国語のよさを理解表現することが豊かな自己主張につながる。
⑤道徳で外国の例を取入れた事による外国の高度の公共性は教材として効果的であった。
国際性の遅れているのは教育の現場ではないか。

・司会　教材の中で行うか……　特設で行うか……

・薩佐主事　・国語では　相手・目的を持った話し合い方、自分の考えをもって話を聞く態度などが大事である。今回は開放されたすばらしい話し合いであった。

・自己の考えを持つために読む……これが唯一国際性とつながるところではないか。

・国語科として目標を達成することがやはり大切ではないか。

⑥授業の中で取り上げれる国際理解は意見のちがいを認めあいながら自分の考えを主張すること、自分の国のよさをしっかり学ばせることが大切である。

⑦外国の話し合いの基本である説得の話し合いの方法が国語の中で生かされていた。
異質の物を認めあえることが国際感覚につながるのではないか。
広い目で国際性を解釈する必要がある。

3．助言者より

・工藤指導主事・国際性とはおもいやりさらに　相手を尊重することではないか。

・相手の国の文化（例えば小説）を理解すること。

・道徳では内面に根ざしていることが大事であり、立て札に依存しての行動、依存しない行動との　違いが大切である。

・高橋新琴似緑小学校長・教師用資料と児童用資料ととりかえたほうがよい。
「外国のようにしよう」というふうにしなかったのがよい。ウィーンの子供達は小さいときからしつけられているとつぶやいた子がいた。

・薩佐指導主事　授業後・子供をほめたがその通りである。思考の経過を持つことが大事である。

・水崎平岸小学校長・納得と説得の論理を身につけること。母国語の言語感覚を身につけること
主体的に立ち向かえる子を――――しっかり相手の言葉をうけとれる子。
教師のかじ取りが必要なら謙虚の力を借りる。　共に学ぶ姿勢。などが大切。

4．ま　と　め

本分科会では、「国際性豊かな子供を育てる授業」を目指し活発な討議が行われた。主に小学校道徳、国語科を窓口にし国際理解教育の日常的な実践はどのようにあるべきか、なにができるか……など現場に即した討論がなされた。

外国における高度の公共心は教材として適当であり、今授業では効果的に扱われており、道徳教育では内面に根ざした動機づけがとくに大事である。などの助言をいただいた。

さらに国語科では直接的に外国の教材を持ってくるだけでなく、何時でもだれでも取り組める国際理解教育……自己を主張する力、自分の考えを持って話を聞く態度の育成など今授業のねらいが非常に関係してくることなどの助言もいただき、有意義な討論を終えた。

（文責　斎藤古文）

第３分科会（中学校　国語）

分科会テーマ　「国際性を培う生徒の育成をめざして」

１．授業者から

「植民地、大連に生きる文蘭を通して、少年の心の成長を生徒に気づかせたい。」
生徒達の一次感想より、やさしい父母であり文蘭は幸せ者だ。という者が多かったが、授業を通じて、その変化がいかにとらえられるかに着目していった。
本時は、・かわいそう　・中国人の命の大切さ　・墓であった　という三点を中心に話し合いを深めていった。学習課題『少年は、なぜ思わず手を合わせたのか』ということから当然出てくる三点であるため、一つ一つ具体化することで、生徒達の考えも深まり、"少年は、文蘭を通して中国人の置かれた状況を知り、その悲惨さに心が傷んだ"ことに気がついていった。多少の緊張感はあったが、よく考え、発表してくれた。生徒達のそのような人間理解こそがしいては国際理解につながり、成長していくのではないか。

２．討議内容

国際感覚をイメージ的におさえるとアメリカ・ヨーロッパという結果が載っており、個人思考性がそのまま、国際化という概念の定めになっていない。国際理解・国際化・国際性……等いろいろあるが、どのような意識を持って進めていくのかが問題であり、重要な課題である。その視点をどう定め、どう盛り込んでいくのか、が大切なこととなる。

国語科の中でそのようなことを考えるには、教科の役割りに制限があるように思われる。それに比べ、英語・社会・音楽のしめる役割りは大きい。例えば、国際性を培うために、まず、言葉を実際に話す。旅行をする。ということから自分自身が主体性を持って、日本人としてのかくたるものを持てる。それが、国際理解につながり、国と国との問題が個人と個人との関係に変わり、それを教科の中で取り組むことではないか。授業のどの場面の中でどう取り上げていくかについて考えることにより、国際性を倍う生徒を育成していくことになるのではないか。その上で教材内容価値と国際理解教育の視点をはっきりと見きわめ、盛り込むことが大切である。国語科においてもその点を重視し進めていかなければならない。

３．助言者から

国際化というものは、日本に問題性がある。歴史の中で50年代は海外に目を向けざるを得ない。現在は高度情報化となり、なおさら国際理解教育が必要となる。学校教育の中で、何を目的にするのかというと、1)自国の文化と伝統　2)異文化理解　3)外国語教育の充実　である。その中で国語科では1)が大切なのである。それを指導することがすぐ国際理解につながる。ただ、教師の指導意図・視点があるかどうかに問題が残る。その内容・価値について充分に考慮しながら進めていく必要がある。

授業については、文蘭の悲しみを少年が自分の悲しみとして共体験している。同化しているといってもよい。と同時に読者も同化している。それこそが人間理解であり、国際理解教育に迫るものといえる。文学の読みとは、読者が共体験としてとらえるものである。

道新にも載っていたが、国際理解とは、そんなになまやさしいものではない。難しく、ほろにがいものである。

（文責　相沢邦章）

第４分科会（中学校　英語）

分科会テーマ　「国際性を培う生徒の育成をめざして」

1．提言内容

・提言の概要　ＡＥＴとのTeam－teaching,カリキュラムでの位置づけ

・授業者からなど　Ｌesson は、ひと通り終了しているが、知識のみではなく擬似体験を通して、英語を身につけさせたいのがねらいである。実際のお金を使い、お金の使い方、サイズの違い、その他の買物の表現など、ＡＥＴからの説明も興味をひきつけられた。グループ学習は、２学期から実践しており、班毎での多くの練習ができた。子供達は、よくやっていたと思う。

2．討議内容（授業について）

○生徒がrellaxして声も大きく、ＡＥＴも気さくに生徒の中へ入っていってよかった。

○導入が大切。訓練だと思うが、生徒の方から質問してＡＥＴに自己紹介してもらうとよいのではないか。また、ＡＥＴからの発音やイントネーションのエラーの指摘がない。そして、ＡＥＴのあとに続けて発音するなどの練習が必要ではないか。文化のちがいにふれさせる程度ではなく、理解させることが必要ではないか。

・ＡＥＴは年間１～２回しか来ていないので、発音の矯正のみでなく、ここでは、自分の言葉として言ってみるという高いレベルへの目標がある。

○最初のモデルダイアログを２回やったが、声をもっと大きく、３回やってもいい。ジェスチャー、そして、最初ゆっくり、２回目ノーマルスピードなど変化をもたせた方がわかりやすいのではないか。英語の授業中は英語がとびかっているのが大切だが、英語でほとんど流れていてよかった。

○ここでのteam－teachingはどうおさえたか。

・プランはこちらでたて、こういう部分の話をしてほしいと依頼する。

3．助言者から

生徒の声はよくでており、英語圏の文化に通じる部分がよかった。子供達同志の会話練習の中に別のパターンをとり入れてもよいのではないか。ある程度言えるようになると別のことを言ってみたい欲求にかられるので。また、生徒とＡＥＴのＫｉｍがやっている中に突然先生が入っていく、というような意外性やバリエーションがあったら面白いのではないか。

国際性ということだが、英語を学ぶことを通して相手の文化を知り、自分の文化を伝えるというのが大切。あちらでは、子供達が大きな米人の中に入っていった時に、「やあずいぶん小さいね」ということは言わない。我々も、安易に「でっかい」と言っていいものか。心地よさを、相手の身になって考えることが大切ではないか。また、ジェスチャーだけでも何とか意志疎通をはかろうと努力する姿勢が大切である。

4．まとめ（今後への展望）　　国際理解教育にはたす教科の役割について

○team－teachingのあり方だが、アメリカへ行ってみせてもらったことがある。

アメリカで教える第２言語の、たとえばＳpanishはネイティヴのＳpanishが教えるので問題ない。オーストラリアのメルボルンの日本人学校にいたときは、週３日本の教科書で、週２現地の人による英会話である。週３の後はteam－teachingだが、英に関すること（文法・和文英訳）と英語と子供達が分けてとらえるようになってきた。よい方法は、というと、日本人のPart.ネイティヴのＰartと分けて渡りをつくることだ。　　（文責　船城由紀子）

第５分科会（高等学校）

分科会テーマ　「世界とむすぶ生徒の育成をめざして」

1．提言内容

①　「姉妹校交流を通して」　　札幌市立新川高等学校　教諭・山崎滋樹

昭和58年８月11日、札幌市との姉妹都市米国オレゴン州ポートランド市のルーズベルト高等学校と姉妹提携に調印、以後１年おきに往来する。昭和60年８月ポ市から中・高校生の親善訪問団、中国の姉妹都市瀋陽市からの交流団と、三市合同交歓会が行われお互に言葉は通じなくとも、心は通じ合えた経験は貴重であった。

平成元年、開校十周年の記念事業の一つとして、各学年から１人と定時制１人、教諭１人計５人を約１週間ルーズベルト校に派遣した。この時期は同校の五月祭に当り、大歓迎を受けた。

こうした交流の沿革の中から、①物の交流より人の交流が有効、②異文化のちがいを強調せず、心のふれ合いを大切にすべきであるが、同時に、交流した成果を全校に発表し、理解を深める機会を作ることも必要である、とした。

②　「21世紀の国際社会に、たくましく生きる人材の育成をめざして」

北海道室蘭清水丘高等学校　校長・武川正明

昭和44年、全道初の英語科設置、昭和55年ＬＬ導入、昭和58年外国人教師配置、以来継続現在専任１講師２計３人配置、昭和59年電子英文タイプライター導入、昭和61年米国マウントエッジカム高校と姉妹校提携、生徒会に国際交流局発足、昭和63年、エッジカム訪日団来校、外国の高校向け文書（英文）及び証明書のサンプル作成、米国・オーストラリアに７人留学、普通科全生徒に外国人教師の授業を実施、平成元年、米国・オーストラリアに５人留学、エッジカム校より２人留学、英語部生徒英訳百人一首出版、留学生受入れ規程、海外留学内規改正、学校・室蘭市北海道紹介英文サンプル作成、英語科２間口、ＬＬ新機種導入、ホノルル杯英弁大会道・東北１位、など生徒・父母・教職員が一体となって幅広いグローバリズムの視点に立った長年にわたるとりくみの成果を提言し、「本校は海外に姉妹校もないし、留学希望者もいないから…」と対応を避ける傾向を、制度・財政上の課題もさることながら、児童・生徒は、国際社会に生きるべき存在であるという、認識と研修の拡充こそ最大の課題と強調した。

2・3．討議内容とQ&A

◎国際交流の促進について、

- 欧米にかたよってはいないか（姉妹校22校中17校）、対象国を拡大することも考慮しては、
- 交流派遣国に、児童・生徒の作品を託すなどして交流の輪を拡げている。
- 受入れについては各種のとりきめが必要である。（校則はそのまま受け入れる－異文化理解、担当教師は英語教師とはかぎらない。交通費用の分担、空港からはホスト側の負担とか、生活費は相場の半額、１ケ月25,000円にしている。ホストファミリーは父母と一般市民へ公募したり、対象学年の父母に呼びかけている。学校として留学生達の地域学習に年間30万円を計上している。中国からの農業研修生を講師にしてギョウザ料理を習っている。交流するとき学校対学校のほうが便利である。りきまず、永続きすることをやっている。

4．まとめ

17人の参加者は胸襟を開いて、個人、自校でのとりくみと課題を出し合った。高密な分科会となった。地球規模での視点は、緯度をのばし経度を広げる契機となろう。　（文責　福田潤三）

記念講演　要旨　「わたしの好きな日本人を考える」

講　師　ハワード・N・ターノフ　氏

私も含め、日本在住の外国人が日本の幼稚園と小学校に対して持っているイメージは、かなり良い。中学校についてはどうかというと、必ずしも同様のイメージとは言えない。否定的なイメージを持つことさえある。

日本の中学校に自分の娘や息子を入学させると、彼らが持つ創造性や自由な発想が摘み取られてしまうのではないか。型にはめられてしまうのではないか。私自身、自分の子どもを日本の中学校に入学させるかどうか、この問題に対してまだ答えを出していない。私だけではなく、日本人と結婚して日本に住む外国人の多くが悩んでいる。日本の中学校、高校に入学させることを恐れている。

話の視点を変えてみたい。今、日本では国際化、国際化とよく言っているが、あまりにもこの言葉を安易に使い過ぎていると思う。

私は、なぜ教育の国際化を大学まで待たなくてはならないのだろうかと疑問に思っている。小・中学校の早い段階から国際感覚を身につけさせることは可能だと思う。

日本の教育システムを改善するために数点、提案したい。

まず第1に、子どもたちに国際感覚を養うことを目的とする小・中学校を数校、実験的に設定してみてはどうだろうか。どうも日本の小・中学校はワンパターンだ。

第2に、インターナショナルスクールをつくること。確かに現在、それに類したものはある。北海道にもある。しかし、私立である。非常にお金がかかる。子どもを入学させるのはとても難しい。私は、文部省がインターナショナルスクールを設立することを提案する。私の子どもも、皆さん方日本人の子どもさんも入学できるインターナショナルスクールである。

第3に、今の日本の4月新学期制を9月新学期制に改めてほしい。強調しておくが、私は欧米が9月新学期制を採っているから日本もそうせよ、と言っているのでは決してない。今、日本と世界各国の学生間で交換プログラムが行われているが、4月と9月では5か月間、約半年間のギャップがある。このギャップがプログラムにとって非常に大きな障害となっている場合が多いのである。実践的に考えて、交換プログラムなどが行いやすいという理由でこのパターンを勧めたい。

第4に英語教育について。この間、フィンランドの人にお会いし、ラップランドのスライドショーを見せていただいた。驚いたことに、小さな子どもたちがとてもきれいな英語を話している。聞けば、小学校3年生から英語教育を始めているという。日本は遅過ぎる。もう少し早めてはどうだろう。少なくとも小学校レベルから英語教育を始めてはどうかと思う。

最後の提案を。皆さん方は大して気にしていないようだが、日本にいる外国人にとってはとても気になることがある。それは、制服である。制服は廃止してほしい。昔は貧富の差があったため、それによって子どもが傷つかないようにと制服を着せた。

その利点は確かに評価する。しかし、今では、そうした意味で制服を着せる必要性はなくなっていると思う。それに、制服はあまりきれいなものとは思えない。制服を廃止するという新しい試みによって、教育にフレッシュ・エア、いわゆる新風を吹き込むことができるのではないか、という期待を持っている。

北海道は、新しいプログラムを始めたり、真の国際理解教育を行うのに最適な土地柄だと思う。それは、歴史を見ると明らかだ。北海道は常に新しいものを受け入れ、開拓を進めてきた。

※　北海道通信　11月14日付第4213号参照　　（文責　高橋　宏）

地球の裏側から

ブエノスアイレス日本人学校の1800日

浦河町立堺町小学校　岡内　猛先生

私が三年間赴任していたブエノスアイレス日本人学校は小中併置校で商社の駐在員子弟を中心に約百名が日本のカリュキュラムにそって学んでいました。

週休二日の国なので、授業日確保の為一年生であっても入学後、数日で給食開始となるのです。一日当たりの時数も当然多くなっています。

スクールバス

治安上の理由から全児童がスクールバスを利用しているので放課後自由に子供たちを残せないのです。

子供たちは、学校だけが日本語圏なのでなかなか帰りたがらないのです。

一旦下校すると一人で友達の所にもいけないのですまあ、なかには滞在の長いベテランもいて一年生でも街を闊歩する子もいましたが。このこと一つ考えても日本はいいですね。（時々変なのはいますが。これは何処も同じことで。）

特に、浦河は山も海も近いし川もあるし、ついでに化石まであったりで。近すぎて有難味を忘れるのが難点ですか。いつも教材難になると、思ったものでした「あそこに行けばあるのになあ。」

それは、小石であり野草であり自然でした。

私たち教師は整列してこの三台のバスを見送るのですが、まるで旅館の番頭さんでした。その前を一年生は、この世の終わりのような顔をして帰っていくのでした。

給　食

全世界に百数十校の日本人学校があるのですが、給食を実施しているのはここだけなのです。近くのレストランから運ばれてくるのですが、肉の国ですから赴任当初は、

「おお、贅沢。なんと絢爛豪華。」

とくるのですが、メニューが、一巡する頃には、

「また、肉ですかあ。」

堺小のなめこそばやカレーライス、おかずなしでいいから、ただのごはんが恋しくなるのです。（また、今回もでました。食べ物のことが。）

なにせ、肉厚3㎝長さ18㎝幅8㎝のステーキですから。熱いうちはいいのですが、冷めてくるので始末に悪いのです。

たまに、調子の悪い子が「おにぎり」なんか持ってこようものならクラス全員の視線の集中砲火でした。私は、それを見てニコニコしてましたけど。（ハイ）

教材と教具

算数、国語などは日本と同じなのですが理科と社会が一番悩みましたね。十月に朝顔の種蒔きをして二年生になってから花の観察ですけど、うっかりしていると蕾を見逃して開花宣言ですから。引き継ぎが大変なのです。日本産の種も貴重でして一粒残らずかき集めていました。むこうにもあるのですが大陸育ちで大雑把、いや鷹揚なのです。ひまわりの原産地は南米ですが、成長がはやいのです。伸びきらないうちにどんどこ咲いちゃうわけです。三年いますとい何がおきてもびくともしなくなりましたが。

日本の桜のかわりに春になるとハカランダの木に紫の可憐な花が咲くのですがこの木を見て子供たちと俳句なんぞをつくったものです。心のどこかに日本を感じたり、考えた学習づくりを思っていたのかもしれません。

社会の時間です。

「バスの運転手さんの服装は、どんなかな。」

「ジーンズ」（先生、焦る）

「電車の運転手さんのは。」

「ただの服」（先生、焦る）

「ポストは赤くて、手紙をいれるんだよね。」

「先生、黄色でゴミがつまっています。」（先生、絶句）

つくづく地球の裏側を実感したものです。

新派遣教師　激励会のお知らせ

厳しかった寒さも和らぎ、日中の日の暖かさに春の足音を感じるようになりましたが、会員の皆様におかれましては、年度末の諸行事等でご多忙のことと拝察致します。

さて、平成２年度「在外教育施設派遣教員」が別紙のように内定したとの連絡を道教委より受け取りました。来年度は、２０名の派遣です。つきましては、恒例の「在外教育施設派遣教員激励会」を、本会主催、北海道教育委員会の後援によりまして下記の通り開催致します。

今年は、新派遣者研修会や帰国報告会の日程の決定が遅れ、お知らせがおそくなってしまいました。卒業式や進路指導年度末業務が迫っていて大変でしょうが、かってご自分が派遣された時のことを思い出して、派遣者への激励や助言に、一人でも多くの会員に出席していただきたくご案内申し上げる次第です。特にかって自分が勤務したと同じ学校に行かれる方がいらっしゃる場合には、是非とも出席していただいて詳しい助言を差し上げて欲しいと思います。　なおどうしても参加できない方は、別紙の内定者一覧を見て「心得や準備等で重要なこと」を電話か手紙で助言していただければ幸甚です。

記

１．日　時　　平成２年３月９日（金）午後６時～８時
２．会　場　　ホテルアカシア　　３Ｆ「はまなすの間」
　　住所：札幌市中央区南１２条西１丁目
　　電話：０１１－５２１－５２１１
３．会　費　　６０００円　（今年も、激励会後の「交流会」はしません）
４．旅　費　　自己負担
５．宿泊費　　自己負担
　　互助会の割引利用券（事務官からもらって直接フロントに提出）を使うとお一人、朝食（８００円）込みで、２０００円位です。

　アカシアには、２月２８日までの期限で１５室（洋室、ツイン程空けてもらって有りますので、アカシアに泊まられる方は至急電話で申し込んで下さい。申し込む際「海外派遣の激励会に参加する者」であることを申し添えて下さい。
　２８日を過ぎますと、事務局でキープしている分については解除しますが、部屋が空いている場合もありますので、一度アカシアに問い合わされることをお勧めします。
　なお１５室は、新派遣者の宿泊希望も含めた数です。もし同室を希望される場合は、お互いに連絡を取り合って下さい。

６．申込み　　激励会の申し込みは、２月２８日（水 まで葉書（住所、氏名、学校名、電話、派遣年度と派遣学校名を記入）で申し込んで下さい。
　（間に合わない場合は電話でも可）
　なお２８日以降でキャンセルされる場合は必ずお知らせ下さい。

連絡先　……　板　垣　　修
昼間：西部小学校　広島町島松２８４
☎　011-376-2104
夜間：恵庭市恵み野西６丁目５－１８
☎　0123-36-3278

平成２年度　在外教育施設派遣教員内定者一覧

管内	所属	職名	氏名	派遣先		
				日本人学校		職名
石狩	札幌市立伏古北小	教諭	澤田　崇	中国	上海	教諭
	札幌市立円山小	教諭	田中　深人	アメリカ	シカゴ	教諭
	新篠津村立新篠津小	教諭	伊藤　永	ルーマニア	ブカレスト	教諭
後志	倶知安町立栗陵中	教諭	細川　清茂	ミャンマー	ヤンゴン	教諭
	小樽市立色内小	教諭	加賀　政治	マレイシア	コタ・キナバル	教諭
空知	幌加内町立添牛内小	校長	一條　敏	ヴェネズエラ	カラカス	校長
	深川市立音江中	教諭	土田　雅満	南アフリカ	ヨハネスブルグ	教諭
上川	旭川市立東陽中	教諭	藤崎　良二	西ドイツ	ハンブルグ	教諭
	旭川市立神楽岡小	教諭	佐藤　敦彦	オーストリア	ウィーン	教諭
	旭川市立愛宕中	教諭	上野　和幸	クウェイト	クウェイト	教諭
	中富良野町立新田中小	教諭	佐藤　努	コスタリカ	サン・ホセ	教諭
網走	北見市立高栄中	教諭	浜田　政三	アメリカ	シカゴ（補）	教諭
	北見市立相内中	教諭	柳原　愛子	台湾	高雄	教諭
	津別町立恩根小	教諭	吉田　寛	スペイン	ラス・パルマス	教諭
胆振	白老町立虎杖中	教頭	富樫　裕	韓国	釜山	校長
	伊達市立伊達小	教諭	畑野　功	オランダ	アムステルダム	教頭
	室蘭市立母恋小	教諭	茨目　幸良	パキスタン	カラチ	教諭
十勝	帯広市立明星小	教諭	菅野　達夫	イラン	テヘラン	教諭
釧路	釧路市立昭和小	教諭	脇田　博昭	インドネシア	ジャカルタ	教諭
その他	道立砂川少年自然の家	指導員	舟崎　征二	ブラジル	マナオス	教諭

事務局だより

1．各支部の活動状況のお知らせを

渡島支部の広報「かけはし」が事務局に寄せられています。渡島支部が調査しました「国際理解アンケート」の結果や冬期合宿研修会の様子が詳しく掲載されています。

他支部でも活発に研究されていることと思います。是非、その様子を事務局までお知らせください。

2．寄稿のお願い

今回、昨年帰国されました日高の岡内猛先生のアルゼンチン・ブエノスアイレスの「地球の裏側」を掲載いたしました。各会員の日常実践や国際理解にかかわる原稿をお待ちしております。事務局あるいは広報部までお寄せください

3．会費の完納をお願いします。

今回、会費の振替用紙あるいは領収書を同封しております。未納の会員はよろしくお願いいたします。

4．「国際理解教育資料コーナー」の整備の継続

・目的：国際理解教育の研究及び資料の収集

・送付先：０６９　江別市文京台４２

北海道立教育研究所資料室

5．会への加入よびかけを

平成元年度の派遣者のなかで４人がすでに加入されています。休眠会員へのよびかけや新規会員の加入を強力に働きかけをお願いします。

＊藤本　伸治先生（松前・清部小）……ジェダ日本人学校

＊柏　征一先生（苫小牧・泉野小）……ニューヨーク補習校

＊村瀬　正貴先生（釧路・日進小）……ビトリア日本人学校（ブラジル）

＊白井　潔先生（本庁スポーツ課）……バルセロナ日本人学校